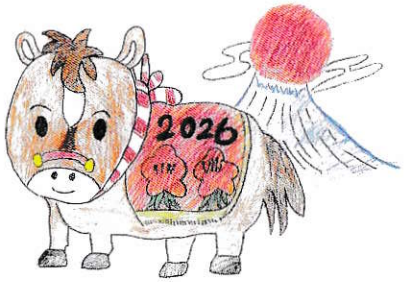
翔 SHO



生雲小学校　髙　紘人　作

山口市青少年健全育成市民会議　阿東支部「会報」　第35号

「といとい」

地福地区　山本　優

一月一四日（水）を中心に、地福各地域で国の重要無形文化財に指定されている「といとい」が開催されました。

市（五区）では、昨年の一二月十四日（日）に参加予定の子どもと保護者、地域の有志が集まって「わら馬」を作りました。地域の方の指導のおかげで50を超えるわら馬が半日で完成しました。

「といとい」当日は天候に恵まれ、予定通り、地区の全家庭を回ることができました。昨年に引き続き、五区の子どもだけではなく、篠生や生雲の子どもたちも参加してくれました。（徳佐からも参加予定でしたが、馬づくりのみの参加となりました。）

保護者が見守る中、夕方六時に公会堂をスタートし、中学生や小学生高学年のリーダーが低学年の子たちを支援しながら、地域のあちこちから「といとい！」という大きな掛け声があちこちで響き渡りました

昨年の秋、テレビ番組で「盆踊り」等の日本の伝統文化が世界からの注目を集めていると紹介ありました。情報社会が進み、逆に人と人とのつながりや一体感が見直されています。「といとい」は高齢者のわら馬の技術、子どもたちの元気な声、大人の見守り、そして子どもたちへの感謝を伝える各家庭のお菓子などを通じた感謝の心、その全てが欠かせません。これからも地域が一つになり伝統行事を守り抜いていきたいと思います。

「といとい」に向けたわら馬づくり

「嘉年土居神楽舞」

嘉年地区　上野　佐知子

嘉年土居集落で神楽舞を継承されている「土居神楽舞保存会」は昭和四十八年に結成され平成二年には山口市無形民俗文化財に指定されています。

保存会の皆様は、奉納神楽をはじめ、嘉年地域内外の各種イベントや山口市内のホテルなどで、年間通して数多くの公演をこなされています。また、公演以外にも伝統芸能継承活動の一環として、神楽観賞や体験会を開催され後継者の育成や団員の増員、子供たちの指導に積極的に取り組まれています。

保存会は現在、保育園児から大人の方まで十四人の方が加入されており、中には嘉年地区以外の方もおられ、忙しい日々の中、嘉年土居公民館で練習を重ねられています。

毎年七月の第三日曜日に嘉年分館で実施される「嘉年ゆうすげフェスタ」では、ゆうすげの花が咲く頃になると、笛や太鼓の心地よい調べが響き渡り神楽舞の演舞が始ります。夕陽の中舞われる神楽舞はとても神秘的で団員の小さなお子様の一生懸命な姿に感動するとともに、大蛇が火を噴く場面ではかけ声があがり、須佐之男命が勇敢に大蛇を退治する気迫溢れる様は観客の皆さんを引き込み最高に盛り上がります。観る度に感動が増す「土居神楽舞保存会」の皆様の演舞を是非ご覧ください。

令和７年 嘉年ゆうすげフェスタにて

編集委員
芳元　聡　松浦　富子
賀屋　良季　阿武　雅己
伊藤　智典　山本　優
金子眞一郎

ー地域の子どもは地域で育てるー

第二十三回 阿東アドベンチャースクール　実行委員会　山根　浩　美

令和七年十一月二十四日～三十日六泊七日で十八名の子供達が参加してくれました。今回印象的だったのが、成長スイッチの入る音が聞こえた事です。怖かった森チャレに挑戦した後、班長のピンチに立ち上がった時、友達が困っているのに気がついた時…本人は気付いてないでしょうが、私達大人は確かにその音をたくさん聞きました。中でも一番多くの子のスイッチが入ったのが、最終日の昼食メニューを考える時です。

アドスク集合写真！

家族の好きな料理は？時間内にできるのか？子供たちは毎日話合いをしました。みんなの思いを込めた昼食、お迎えに来てくださった家族、一週間共にした仲間、みんなに美味しく食べてもらえて、子供たちの達成感は最高潮でした。本当に美味しかったーそして終了後のアンケートで、親は子の、子は親の存在を改めて確かめたという声が多く聞かれました。今回感じたいつもそばにある物、そばにいる存在が当たり前だと思わず、感謝する心、大事にする心を大切にしてほしいです。家を離れてのお泊りが初めての子、二年生の時から楽しみにしていた子、親に行って来いと送り出された子、みんなが帰ってすぐ来年も行くと言ってくれたと聞いて嬉しかったです。テレビやゲーム、マンガ本がないのが耐えられないと一日目に訴えてきた子供の多さに唖然として始まった今回のアドスクでしたが、大学生の優しさ、大人の温かさに支えられ成長の一週間になったと思います。おいしいほうれん草をくださった倉田さん、登校支援をしてくださった地域のみなさん本当にありがとうございました。

パイプラインで心を一つに！

最終日の昼食！美味しかった！

「ふるさとから学ぶ」

山口市立生雲小学校　校長　西嶋　智

水田、果樹園、森林、長門峡、生雲フェスタ、小学校地域合同秋季大運動会、生雲地区敬老会……。生雲や阿東には、学びの素材が数多くあり、挙げればきりがありません。

例えば三・四年生は、長門峡について調べました。子どもたちは長門峡に魅力を感じ、「生雲渓を昔のようにきれいにするにはどうすればよいか。」「生き物を大切にする町にするために自分は何をすればよいか。」など、一人ひとりが課題をつくりました。この学習では、地域の方にいろいろなことを教えていただいたり、子どもたちが作ったアンケートに答えていただいたりしました。

五・六年生は、中庭に小さな水田を作り、お米作りにチャレンジしました。生雲に広がる水田を見て育っている子どもたちですが、稲作の手順はよく分かっていません。この学習で実際に作業に取り組む中で、稲作の素晴らしさを実感したのです。これらの作業も地域の方に丁寧に教えていただきました。子どもたちはその感謝の気持ちを伝えるために、収穫したお米やそのお米で作ったポン菓子を、地域の皆様に配布する計画を練っているところです。

このように、子どもたちはふるさと生雲、ふるさと阿東から様々なことを学びながら、自ら考え、学び取る力を身に付けています。その過程で地域の人々の温かさを感じ、ふるさとのよさを実感しています。

学習田の稲刈り

「徳佐子ども会」

徳佐地区　賀屋　良季

徳佐子ども会では、未就学児から高校生までの子どもたちと保護者を中心に、年間を通してさまざまな行事に取り組んでいます。少子化により会員数は少なくなりましたが、その分、高学年の子どもたちが企画立案や運営に積極的に関わる活動を取り入れ、主体性を育むことを大切にしています。

八月十五日に開催された徳佐夏祭りでは、ゲームコーナーの「糸引き」と飲食コーナーの「タピオカドリンク屋」を出店しました。準備段階から夏休み中に複数回の子ども会議を行い、出店内容やメニュー選定、試作、価格設定、役割分担、人員配置までを高学年の小中学生を中心に話し合いました。当日はご年配の方から小さなお客様にも分かりやすく優しく対応し、呼び込みから運営まで一生懸命に取り組む姿が印象的でした。元気な声と見事な連携でサービスを提供し、「もう一度やりたい」「おいしかったよ」という声に子どもたちの笑顔が広がりました。予定を超える時間まで協力し合い、両店とも盛況のうちに完売。大きな自信と達成感を得る貴重な経験となりました。得られた収益は活動費のほか、地域のために何ができるかを考える学びに活かしていきたいと思います。今後も地域に貢献できる活動を続けてまいりますので、温かいご支援をお願いいたします。

徳佐夏祭りへの出店

「生雲どんど二〇二六」

生雲地区　阿武　雅己

生雲地区では、毎年の恒例行事である「どんど焼き」を一月の第二土曜日に行っています。今年は一月十日当日に山口市に林野火災警報が発令され、屋外での火の使用が制限されたため延期となりましたが、新春を迎えるにあたり当初の予定どおり青少年育成生雲地区民会議で恒例の「正月遊びイベント」を開催いたしました。

今年も地域の子どもたちが楽しめる企画として、「巨大すごろくゲーム」を準備し、多くの参加者に喜んでいただきました。特大サイズのマス目とサイコロを用いた遊びに加え、前日の夜に役員の皆さんが集まり、子どもが楽しむ姿を想像しながら、ああしようこうしようと相談しマス目ごとにチャレンジコーナーを設けるといった工夫も懲らしました。

当日、先ずはすごろくを始める前に六年生二人が新年の抱負、また、4月から中学生となる意気込みを述べ、引き締まった開会での始まりとなりました。すごろくはメンバー3人のチーム戦で、チャレンジコーナーでは、会長とのジャンケンで勝てば大きく進み負ければ後退、輪投げや、チーム皆で大声を出して笑わなければならない、カッコいいポーズをキメなくてはならないといったマスもあり、まるで人生の縮図のようなすごろくとなりました。

また、生雲地区ならではの歴史クイズでは、久坂玄瑞が訪れていた大谷家別邸「楽山亭」や、雪舟が作庭されたと伝わる「常徳寺庭園」、蔵目喜にある「桜郷銅山水選鉱跡」といった回答にひねりを加え間違いを誘ったり、一番の大どんでん返しとなったのはゴール手前でスタートに戻るといった作成側の思惑通りにハマったチームもあったりで、子どもたちは大喜びですごろくに熱中し、笑顔の絶えないひとときを過ごすことができました。

このような活動を通じて、地域の皆さまのつながりや子どもたち自身の協力の精神が育まれる場を創出していくことが、わたしたちの役割であると感じております。

本年度も青少年育成を通じ、地域の皆さまとともに安心安全な環境を整え、次世代を担う子どもたちの健やかな成長を支援していきたいと考えております。

巨大すごろくゲーム

「人づくり、地域づくり」

篠生地区　伊藤　智典

今年も篠生青少協では、篠生地区内の国道や県道に面したチェーン着脱場のゴミ拾いを行いました。昨年は2度実施出来ましたが、今年は6月の1回のみの実施となりました。迷惑行為防止のために着脱場に設置した赤い鳥居も月日とともに効力も弱まり、残念なことにゴミの量も増えた気もしました。ペットボトルや空き缶、ファーストフードやコンビニでの買い物袋のゴミなどが草の中に隠すように捨てられたり、家庭で使われていた壊れた家電製品が置かれていたりしました。またたばこの吸い殻が塊りで捨ててあり、車の灰皿のものを捨てたと思われて気持ちが滅入ります。

一部の人がゴミを捨てているのだと思いますが、一人一人がゴミの持ち帰りを心掛けるようになれば、「ゴミ拾い」という言葉も不要になるのにと思います。

ゴミを捨てる人の気持ちはわかりませんがゴミを拾って清掃してくれる人の気持ちをゴミを捨てる人が、少しでも考えてもらえたら幸せだなと思います。

毎年ゴミ拾いを行ってもゴミは減らず、十袋程度のゴミを回収しますが、このゴミ拾いに協力してくださる会員のみなさま方に感謝し、これからも少しでもゴミが減ることを願い、チェーン着脱場等の清掃作業を続けていきたいと考えています。

清掃活動の後で